

悪魔はまるで底なし沼のように食べては飲み、飲んででは食べ、あまり飲み過ぎて食べ過ぎたため、ついには気持ちが悪くなってしまいました。

聖ミッシェルはあきれた様子で立ち上がり、雷のような声で叫びました。

「私の前で酩酊するとは何事か。私の前で... 行儀の悪いやつだ！  
何様のつもりだ！ 私の前で...」

無我夢中の悪魔は飛び上がって逃げ出し、聖ミッシェルは、そこにあった棒をつかむと悪魔を追いかけました。

二人は下の広間を駆け抜け、支柱の周りをぐるぐる回り、外の階段を駆け上り、崖っぷちの小道をまっしぐらに駆け、怪物を象った雨水落としの間を飛び回りました。かわいそうな悪魔は、気分の悪さに涙まで流し、聖ミッシェルの屋敷のあちこちを汚しながら、それでも逃げまどいました。そしてついに、海高くそびえ立つ、聖ミッシェルの屋敷の一番上のテラスにたどり着きました。眼下には広大な入り江が広がり、遙か向こうの陸地に、木々と牧草地に囲まれた村々も見えます。もはや悪魔には、逃げ道がありません。聖ミッシェルは、悪魔の背中を怒りとともに蹴り飛ばし、まるで蹴鞠かなにかのように空中に放り出したのです。

悪魔は槍のように空を舞い、そしてモルタン村の少し前にドスンと落ちこみました。悪魔の二本の角と手足の鉤爪は、その勢いで岩に奥深く突き刺さりました。この岩には、今でも悪魔の落下した跡が残っています。

悪魔は、世の末まで不自由になってしまった足を引きずりながら、やっとの思いで立ち上がりました。そして、夕日に照らされて遠くに垂直に聳える恐ろしい聖ミッシェルの丘を見遣り、こんな不公平なけんかを続けても、自分の負けは目に見えていると悟り、数年来の強敵に田畑も、平原も、丘も谷も、牧草地も明け渡し、痛む足をさすりながら、遠い遠い国に向かってすすごと歩き出しました。

ノルマンディの守護聖人聖ミッシェルは、こうして悪魔を退治したのです。

1882年12月19日

フ  
ラ

ンスの村落一つひとつは、村人の姿を借りた守護聖人の加護を受けています。

さて、サン・ミッシェル、つまり聖ミッシェル(大天使ミカエル)は、バス=ノルマンディ地方を護る守護聖人で、美德に溢れた百戦錬磨の天使、正義の象徴、天空の英雄、勝者、悪魔を抑えつける勇者であります。

ところが、悪賢くて抜け目なく、屁理屈屋で有名なバス=ノルマンディ地方の人々の間では、聖ミッシェルと魔王の戦いは、少し違って語り継がれているのです。

近くに住む魔王の意地悪から逃れるため、聖ミッシェルは自らの手で、海の真ん中に大天使にふさわしい見事な館を建立しました。大天使にふさわしいと言ったのは、聖ミッシェルほどの聖人でもない限り、これほどの屋敷を建てることはできなかったからです。

しかし、聖ミッシェルは、それでも魔王の魔の手が自分の身にふりかかることを恐れ、屋敷の周りを、海よりもたちの悪い流砂で囲んでしまったのです。

魔王とはいえば、海岸沿いの質素な藁葺小屋に住んでおりましたが砂の上しか領土を持たない聖ミッシェルとは違い、塩水がよく効いた広大な牧草地と、毎年大きな収穫をあげる恵まれた美しい田畑を持っており、付近一帯の豊かな谷間や、肥沃な丘を手にしておりました。つまり、悪魔はしこたま儲けておりましたが、聖ミッシェルの方は乞食ほどにもばつとしなかったというわけです。

さて、数年にわたって禁欲生活を続けたものの、聖ミッシェルは結局このみじめな生活に嫌気が差し、ついには悪魔と取り引きをすることを思い立ったのでした。とはいえ、悪魔は強欲で、自分の収穫を手放そうともしなかったので、そううまくことは運びません。

聖ミッシェルはまる6か月考え抜き、そしてある朝、ゆっくり陸地へと歩を進めました。聖ミッシェルが向かってくるのを見つけた時、悪魔は門の前でスープをいただいておりましたが、すぐさま迎えに駆けつけて丁重に挨拶し、門を差して招き入れ、ひと休みするよう誘いました。

聖ミッシェルはお椀になみなみと注がれた牛乳を飲み干した後、

「お前さんに有利な取り引きを持ちかけるため、ここまで来た」と話しかけました。

根が無邪気な悪魔は、何の疑念もなく「良いでしょう」と答えたのでした。

「お前の土地を、全て私に譲りなさい」

驚いた悪魔は不安にかられ、口を挟もうとしたのですが、聖ミッシェルが制しました。「まあ良いから、最後まで聞きなさい。まず、お前の土地を、全て私に譲りなさい。田畑の手入れや野良仕事、家畜の世話、種播き、肥やし播き、そのほか全て私がやりましょう。その後で、収穫を山分けしようと言っているのです。お前にとっても、悪い話ではないでしょうに」

根が怠け者な悪魔は、二つ返事で了解してしまいました。

ただ一つ悪魔は、海にぼつんと聳える聖ミッシェルの御殿の周りで獲れる、おいしい新鮮なひめじを何匹か自分の取り分に加える言い張りしました。聖ミッシェルは、おいしいひめじをごちそうすると約束しました。

天使と悪魔は握手を交わし、取り引き成立の証拠として、脇の地面に向けてお互いに唾をはきました。それが済むと聖ミッシェルは、「そうそう、後になってからお前に文句を言われたくはない。今のうちにどちらがいいか選んでくれ。地面の上と下、どちらを取るかね」と、言いました。

悪魔は「それはもちろん地上のものがよい」と大声で答えました。

「よろしい、分かった」と聖ミッシェルは念を押し、そして立ち去りました。

ところが、六か月後、悪魔の広大な領地の景色は一変してしまいました。ニンジンやカブラやタマネギ、洋風ごぼうなど、滋養豊かな根っこはおいしく風味があるけれど、葉っぱのほうは良くても、家畜のえさにしかならない野菜しか見られなくなってしまったのです。

何一つ分け前のなかった悪魔は、聖ミッシェルを「ペテン師」呼ばわりし、約束をご破算にしようとしていました。

そこで、畑仕事ですっかり気に入ってしまった聖ミッシェルは、もう一度悪魔との話し合いに出向いたのです。

「地面の上と下の話は全く忘れておった。気が付いたらこのようなことになっていたのだ。わざとやったのではないのだから、そんなに

気を悪くすることはない。その埋め合わせに、今年は、地上の収穫物をお前の取り分にしようじゃないか」と聖ミッシェルは言いました。

悪魔は「良いでしょう」と了解しました。

次の年の春、悪魔の土地一面には丸く膨らんだふくよかな小麦や、釣り鐘のように大きなからす麦、亜麻、美しい菜の花、アカツメクサエンドウ豆やキャベツやアルティチョークなど、陽光を浴びて種や果実を实らせる野菜が、隙間なくなりました。

悪魔はまた何ももらえず、本気で怒りました。

ついに悪魔は自分の土地を取りかえし、畑を耕しはじめました。隣の聖ミッシェルが持ちかける新しい取り引きには耳一つ貸しません。

そうして一年が過ぎました。ぼつんと立った屋敷の高みから、聖ミッシェルは遙か遠くの肥沃な大地に見入り、悪魔が野良仕事を指揮して作物を刈り込み、麦を打つのを見つめました。そして聖ミッシェルは、自分の力のなさにイライラしては腹を立てたのでした。もはや悪魔をからかうことのできなくなった聖ミッシェルは、腹いせに仕返しをすることを決心し、次の月曜日の夕食に招きました。

「私との取り引きに不満だったのは分かっている」、と聖ミッシェルは話しかけました。「ただ、お前と私の間に恨みが残っているのは良くなかろう。夕食にはぜひ来なさい。おいしいものをたくさん用意して待っている」

怠け者で食いしん坊の悪魔は、すぐに申し出を受け入れました。当日、悪魔は一張羅を選んで粧し込み、モン・サン・ミッシェルに向かいました。

聖ミッシェルは悪魔を豪華な食卓の前に座らせたのです。まずは、鶏のとさかと腎臓のつまったヴォロヴァンのソーセージ用ひき肉添えが出され、それに続いてひめじのクリーム和え、それから栗のワイン漬けを添えた七面鳥の胸肉、それからまたケーキのように柔らかいブレサレ羊のロースト、それからまたまた口のなかでとろける野菜と、溶けたバターの香りを当たりにまき散らす熱々のガレット。

飲み物は柔らかな泡立ちの甘いシードルから始まり、赤くて官能的なワイン。そして一つひとつの料理の間には、年代物のカルヴァドスがふるまわれました。